

第11期東京都生涯学習審議会

第3回全体会

会議録

令和元年11月25日（月）

午後6時04分から午後8時04分まで

都庁第二本庁舎31階 特別会議室24

○出席委員

笹井 宏益 会長

酒井 朗 副会長

青山 鉄兵 委員

永島 宏子 委員

林 幸克 委員

広石 拓司 委員

松山 亜紀 委員

第11期東京都生涯学習審議会 第3回全体会 会議次第

1 開会

2 議事

区市町村の中高校生対象施設の取組に学ぶ

(1) 紹介①

文京区青少年プラザ b-1ab

(2) 紹介②

調布市青少年ステーションCAPS

(3) 審議

3 今後の予定

4 閉会

【配付資料】

第11期東京都生涯学習審議会全体会（第3回）次第・資料

第11期東京都生涯学習審議会第3回全体会

令和元年11月25日(月)

開会：午後6時04分

【生涯学習課長】 ただいまから第11期東京都生涯学習審議会第3回全体会を開催させていただきます。

本日、委員の皆様の出席予定7名となっております。土屋委員、野口委員、山崎委員につきましては御欠席との連絡をいただいております。それでは、本日の資料の確認をさせていただきます。机の上に次第、座席表とタブレット端末を置かせていただいております。

本審議会での説明に関しましてはタブレット端末を使用いたしましたペーパーレス会議とさせていただきます。本日の審議資料は57ページまでとなっております。

本日は、中・高生を対象とした施設の紹介といたしまして二つの施設から御出席をいただいておりますので、最初に御紹介をさせていただきます。

まず、b-lab館長の白田好彦さんでございます。

調布市青少年ステーションCAPS館長の平澤和哉さんでございます。

同じくCAPS主任の北村真さんでございます。

CAPSの卒業生の大澤卓巳さんでございます。

両施設とも、今の中・高生の特性を捉えて、居心地の良い施設運営や中・高生が主体的に関わることのできる事業を様々な仕掛けを凝らして取り組んでいらっしゃいます。既存施設とは異なる新しい視点を持つての取組を学ぶことによって今後の審議の参考とさせていただきます。

それでは、ここからは笹井会長に議事進行をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

【笹井会長】 今日は、中・高生を対象として活動されている二つの施設、二つの団体から、施設の概要や活動の状況等に関連して、施設運営上の課題や今後の青少年教育の振興に関する課題等についてお話しさせていただきます。

まず初めに、文京区青少年プラザ b-1ab の事例を伺って、質疑応答をしてから、その次に調布市青少年ステーションCAPS の事例と質疑応答と進めていきます。

それでは、まず初めに文京区青少年プラザ b-1ab の白田さん、どうぞよろしくお願いたします。

【白田館長】 文京区青少年プラザ b-1ab 館長の白田と申します。

私自身は元々、八王子市の自治体職員を6年ほどしておりまして、児童館に勤務しておりました。転機となったのは2012年のタイミングで、Yahoo!ニュースでこどもの城が閉館するというニュースを見たときに、放課後の子供たちの居場所の施設というのは価値を伝えていかないと予算がなくなってしまうかもしれない。そのときに私はすごく危機感を感じたのです。自分たちの活動を発信しながら新しい実践を積み重ねるところは何かと考えたときに、こちらの b-1ab という施設が2015年4月に開館することを知りました。またとないチャンスなので、NPOに転職して、それから5年が経過しようとしております。

主な仕事は、今、文京区で中・高生の居場所施設の運営をしていることと、ほかにも文京区内の中学校・高等学校でアクティブラーニング、プロジェクトベースラーニング等、探究学習の支援やキャリア教育支援も行っております。そのほか、団体としては、長野県教育委員会様と連携しながら、高校生の主体的な活動の発表会をマイプロジェクトアワードと題しまして、長野県教育委員会主催のイベントに協力という形で関わったり、川崎市で、いわゆる高校生の主体的な活動を4か月間伴走して立ち上げるようなイベントも行っています。

私自身は児童館の活動にゆかりがありまして、今日事例発表する北村さんとは2013年のころから一緒に居場所の価値を考えている仲間です。

まず、団体の概要についてですが、認定NPO法人カタリバという団体がこちらの文京区の施設を業務委託で運営しております。「未来は、つくれる。」と題しまして、「どんな環境に生まれ育っても、未来をつくりだす力を育める社会」を目指して、「意欲と創造性をすべての10代へ」届けるために活動しています。

活動範囲を具体的に絞らず、全国各地で多岐な活動をしています。大きく分けると三つで、一つ目は「地域に10代の新しい居場所をつくる」活動です。私の施設のように、地域に新しい居場所を作る活動を行っています。被災地支援を行うこともあれば、ほかにも子供の貧困の学習支援等も行っております。二つ目は「学校や地域にプログラムを届け

る」活動です。出張授業カタリ場というキャリア学習事業を2001年から展開しております。三つ目は、「高校や行政の中に入り学校と社会をつなぐ中間支援」の活動です。学校の職員室や教育委員会の中に席を置きながらコーディネーターとして活動しております。

特に御紹介したいのは、我々のスタンスである「ナナメの関係」です。縦の関係、親や先生という関係も必要です。友達という関係も大事です。ただ、本当に子供たちが自分の心と向き合うときに、ちょっと年上の大学生や地域の大人の存在が必要なのではないかと考えております。「ナナメの関係」で本音の対話を引き出す。これがうちの団体の活動の基礎となっております。

続いて、施設の概要を簡単に御紹介します。文京区の中・高生が放課後、休日を過ごすことができる場所になっていまして、今のところ、文京区に住んでいるか、通っているか、勤めている子のみ使える施設となっております。

場所的には文京区の端、湯島にあります。文京区は、幸いにも地下鉄が丸ノ内線、千代田線、大江戸線など交通網が発達しており広域から来るのですが、「真ん中にあったら良いよね」という声も一部ではございます。

施設は3階建てになっております。こちらは1階の様子で、2階、3階の図は皆さんのお手元の資料のほうにございます。

様子としましてはこのような様子です。みんなで楽しくクッキングをしたり、時には真剣に勉強してみたり、音楽ホールがありましてライブをやってみたり、運動ができる施設として2階にバスケットコートがございます。3階では卓球ができるという施設で、中・高生の可能性を最大限発揮してもらっている施設です。

コンセプトは「中高生の秘密基地」であり、加えて、文京区が出している文京区教育センター基本プランでは三つの目標があります。こちらを達成するために、私たちは「居場所」と「ステージ」ということをキーワードにしながら施設の運営をしております。

年間で2万8,000人ぐらい来館している施設です。

できるまでには約13年かかっております。「中高生にも居場所が必要だ」という地域の声があって、文京区において教育センターの施設再編の際に、中・高生の居場所も施設の中に作ろうということで生まれた施設となっております。

以上が施設の概要です。ここからは施設の特徴について御説明してまいります。四つに分けて御紹介を差し上げます。

まず一つ目は「中高生の主体的な活動を支える」です。

b-lab では、こんなことをやってみたいと思う中・高生を公募しております、今40人ほどが20ほどのプロジェクトを動かしています。一人でやる子もいれば、グループでやる子もいます。フリーペーパーを作ったり、プログラミングでゲームを作ったり、b-lab のイベントを企画運営したり、様々な活動に取り組んでいます。

その中で私たちが大事にしているのは、プロジェクトに「マイ」を付ける、マイプロジェクトという概念です。一言で言うならば、自分の中にある、こうあってほしいというものをプロジェクトにしたものです。今、学校の中でも大きく探究的な学びが着目される中で、教えられる学びではなく、自らの内発的な動機から学ぶスタンスが求められています。このスタンスを社会教育施設でも実践していきたいと思い、実践を重ねております。具体的に、いわゆるプランニングに終わらずに実際にアクションしてみるというのがポイントです。アクションした上での学びを次のアクションにつなげていく。この連鎖を作ることがこれからの新しい学びになっていくと考えております。

例えばこんな子がいます。彼が操作しているのはDJの機械です。学校の部活動ではDJを取り扱うことはなかなかありません。そういったものに挑戦したいと職員に打ち明け、実際に自身で演奏している様子です。その後彼は、左上の写真はラジオを、音楽を流しながらやってみたり、右下は、b-lab の共有スペースをアゲたいと思い立ち、音楽をミックスして流したりしています。

このときにすごく大切だなと思うのは、私は次の写真に集約されているとっていて、今紹介した彼はここにいます。それ以外にこんなにたくさんメンバーがいるのです。緑の丸が大学生、友人たちですね。彼のラジオイベントと一緒に盛り上げています。黄色い丸はスタッフです。スタッフが一番体を張ってコスプレ等も少ししています。やってみたことが他者に影響を与える。すなわち、大人や周りに受け入れられていると感じることができるよう、フォロワーがいることが重要です。そんな場をこのサードスペースで大事にしながらスタッフや大学生が若者の主体性を支えております。

ここで言う若者は、利用者である高校生に限りません。b-lab には大学生ボランティアが関わっています。運営して5年の気付きとして、ここは、中・高生の場所であるとともに若者が成長する場所であると感じております。4か月程度で、人数は15名程度常時活動しております。

例えばこの彼女は、中・高生のリアルを知りたいということで、ボランティアに申し込んで、b-lab で4か月活動しました。その後、彼女はインターンとなって、今度は大学生

ボランティアのみんなを支える側に回りました。b-lab の中で、中・高生との関わりから始まって、そこから今度はコミュニティマネジメントのほうに自分の関わりを上げていったのですね。よりコミットしたい若者の意欲を大切にすることが b-lab にはあります。

ほかにも、彼は私と同年で社会人です。仕事は SE をしており、中・高生との関わりはありませんが、ボランティアとして自身のスキルを活かしながら若者と関わりたいと参画してくれています。また、彼は漫画を描くことがとてもうまく、そんな特技を生かしながら活躍してくれています。自分たちのスキルを生かしながら若者とともに成長する。そんな機会が私たちの施設にはございます。

三つ目です。偶発を生む多様な場があります。

一つ事例を御紹介させていただきます。「居酒屋のめない」というイベントを b-lab の中で行いました。これは、とある定時制高等学校の高校生がほかの利用者と関わりたいということを実現すべく実施したプロジェクトですが、ここに至るまでは、やってみたくてチャレンジできない2年間がありました。「話したいけど話せない」。学校の中でもなかなか友達と話せなくて、半年間は b-lab に来てもずっとパソコンをたたっているだけでした。彼の b-lab に来る目的はインターネットを使うことでした。それが変わったのは、受付でいつも入館カードをピッと通すスタッフとの関わりでした。「またきたね」最初はそんなやりとりだけでしたが、次第に受付でスタッフと話し込むようになり、「実は人と話すイベントをやってみたいんだよね」とスタッフにホンネをこぼしました。「それだったら b-lab の中にサポートしてくれる人がいるから一緒にやってみたら？」とスタッフはすかさずその気持ちを繋ぎ、行動につながるようサポートしました。彼の世界はそこで、ゲームをやる世界からほかの世界につながったのです。スタッフとの関わりを通し彼の世界は広がりました。

そもそも、彼が何かをやってみようと思えたのは、施設のなかに「やってみたい」に自由に取り組む利用者やスタッフの姿があったからだと思っています。プレゼンテーションをする女の子もいれば、ギターをやる男の子もいて、ダンスをやる男の子もいます。彼はパソコンをたたきながらそんな子たちを見ていたのです。そんな子たちに憧れて、自分もやってみたくてというものに挑戦することを試みました。

いろいろな人、興味関心、きっかけ、コミュニティ、この多様性が目的を持った利用者に別の目的、次の目的を与えていきます。

居場所とはなにか。定義が様々ある中で、私はこの方（田中哲氏）の居場所の定義をよく

使わせてもらっています。一つ目は、「Being」——ここにいることがまず無条件に承認されるのです。その上で二つ目、「選択できる」いないことも選ぶことができる。これがこれからの中・高生の居場所には非常に大事な要素になってくると考えております。

一番最後です。権利の主体であることを知る。

先日、このようなイベントを実施させていただきました。写真を見ていただくと、椅子が逆さになって積み重なっていたり、ほかにも、本来、畳であったものをひっくり返して本棚にしてみたり、あえて本を全部裏返しにしてみたり、いわゆる現代アートの取組をこの施設の中でやりました。一見するとぐちゃぐちゃにしていると思われるかたもいるかもしれませんが。この事業のねらいは、利用者がこの場所を自分たちの手で作れることを感じてもらうことにありました。

そのきっかけになったのは、私自身が内閣府のプログラムで学んだユースワークの概念でした。簡単に言うと、青少年のためではなく、青少年とともに、forではなくてwithと関わるというスタンスです。加えて、私が留学したオーストリアではこの二つのキーワードで表されていました。FUN&RESPECTですね。

これは現地のコーディネーターが書いたものですが、若者をサポートするために様々な取り組みがあります。様々な情報にアクセスできるユースインフォメーション、若者がやっている様々な団体にアクセスできるユースオーガナイゼーション、個々人がチャレンジしたいこと、要はマイプロジェクトを支援するプライベートプロジェクト、そしてサードプレイスであるユースセンターにもアクセスできる。その他、モバイルユースワーク、児童館、等もあります。このベクトルが全て若者自身から選択できるよう伸びているというのが、当人の主体性を尊重するユースワークのポイントだと私は感じています。サービス側から手を差し伸べるのではなく、若者が選択することができるサービスを多様に作る社会がこれからの日本にも求められてくるのではないかと感じています。

写真は現地のユースセンターのもので、ウィーンの施設なのでおしゃれな色合いだったのですが、私が気に入っているのはこの写真で、この部屋はユースワーカーが自分たちで社会を変えられることを若者たちとともに革新している、正に試行錯誤している部屋でした。

私自身がこの施設全体で大事にしたいと思っている概念は、まさに居場所とステージを行き来しながら、最終的には自分が意見を表明するなど自己実現することで自分の関わっている半径5メートルを変えられるという経験を感じてもらうことです。ポイントは、こ

の矢印は行ったり来たりするということですね。勇気を出して踏み出し、未知と出会って戻込みすることもあります。ここを支えるのが人です。ユースワーカーです。スタッフによる伴走を通してこのあたりを見極め、支え、施設全体として参画と主体性を軸にしながら運営しております。

施設のイベントはいろいろやっているのですが、b-lab のホームページにまとまっておりますので割愛させていただきます。勉強のイベントもあれば、漫画のイベントもあれば、ギター等コミュニティを運営するようなイベントもございます。

少し施設の運営上の課題を御紹介差し上げます。

例えば専門職の必要性です。私たちは若者の専門家ではあるのですが、本当に困難を抱えたケースの心のケア等を行うことはできません。このあたりは私たちの限界として認識したうえで、必要に応じて正しく福祉的なネットワークにつなげるなど、臨床心理士さんにすぐ相談できる機会が必要だと考えております。

二つ目、多様性を担保する人材の確保。このあたりは今ボランティアを流動的にすることで担保してはいるものの、まだまだ足りないと感じています。施設に50人、100人くらいの地域の大人たちが出入りする状態、それこそが本当に多様な中・高生を拾うために必要な場所なのではないかと感じています。

地域の人を巻き込むというのもそういう意味合いです。施設の多様性、将来の多様性を担保するためにこの巻き込みというのは重要だと思っております。

最後に、学校教育との連携と書かせていただきました。出張 b-lab と題しまして、私たちは、これまで団体として持っていたノウハウ、キャリア学習のノウハウを生かして、実際に私たちが学校の授業を2コマもらいまして、簡単な自己紹介の後に、先輩の話という、私たち自身が高校生のときのうまくいかなかった話、それをどう乗り越えたのかというのを紙芝居にまとめて披露いたします。それを皮切りに、自分自身が将来どんなことをしたいのか、どんな進路を選びたいのかを考える。そんな時間を学校に届けています。

私たちが会いに行くことで、また会いに来る循環を作る。いわゆるモバイルユースワーカーを学校に対して行っていますが、まだまだ良いプログラムにできると感じています。可能性として模索したいのは、学校外における学修単位認定です。学校の単位が課外活動で認められるという制度が実際に存在する中で、私たち自身もそれに資するような事業を展開することができるのではと感じています。学校の中に入っていただくだけではなくて、学校の外での活動を通し学校をサポートする。このあたりも学校と社会の境界線をとかしてい

く上では非常に大事な観点だと考えております。

最後になりますが、まだまだ中学生、高校生の居場所施設というのは足りないと感じています。それはもちろん、大きい体育館があるとか、会議などに利用できる場所があるということもあるのですが、本当に必要なのは、場所という概念以上に、すぐ隣に話せる相手がいる。信頼できるフォロワーとのつながりが感じられる居場所なのではないかと思っています。相談場所があっても、子どもたちが相談できるとは限りません。信頼できる誰かがたくさんいる社会を作っていかなければいけないと思いますし、そのための基地としてユースセンターなどの居場所施設というものは必要になってくるのではないかと考えております。

【笹井会長】 どうもありがとうございました。

質疑応答と御意見と少し分けて、御意見は皆さんの発表が終わってからいただきたいと思うのですが、ただいまの白田さんの発表に関して質問等ございましたらお願いしたいと思います。いかがでしょうか。

なければ、私から。縦、横と比べて「ナナメの関係」が大切だとおっしゃったのですが、なぜ「ナナメの関係」が大切なのでしょうか。

【白田館長】 このナナメの定義は何とも難しいなと思いながらのところではあるのですが、よくサザエさんを比喻に説明するのです。サザエさんの場合、縦の関係というのは波平さんですね。これは怒られる関係として必要だと思います。指導してもらって存在として必要だと思っています。友達というと、野球によく誘う中島君がいるのです。「野球やろうぜ」といつも言う中島君ですね。では、カツオが本当に正直に、野球の話ではなくて、中学校、高等学校のキャリアを話すときに、どこまで腹を割ってこの方々に話せるかどうかということなんです。縦の関係には勇気が要ります。横の関係には、もしかしたら「何言ってるの?」と言われるかもしれないという心配があります。そんなときに「どうしたの?」と話し掛けてくれるナナメの存在、これは伊佐坂さんのお姉さんというポジションがいるのですが、そういうところがもしかすると本音を話しやすいのかもしれないと思っています。

そのようにほどよい距離感で手を差し伸べる存在が必要なのではないかという仮説をもって「ナナメの関係」と使っております。

【笹井会長】 居場所というのは自分の本音を話せる機能を持つところが大事ということですね。

【白田館長】 おっしゃるとおりですね。

【笹井会長】 分かりました。

どうでしょう。ほかの皆さんはいかがでしょうか。

【青山委員】 児童館の職員をされていてb-1abにこられたということで、両方の施設を御存じなのだと思うのですが、b-1abの場合は文京区の教育委員会所管になっています。中・高生支援を行っている施設には、いわゆる児童厚生施設としての側面と教育施設の側面、両方持っているところが多いと思いますが、いわば教育施設として位置づけられていることについて、児童館との違いというか、行政上の位置づけに関する特徴の中で何か感じていらっしゃることはありますか。

【白田館長】 そもそもb-1abは、開館当初は区長部局の施設で、福祉分野の施設でした。それが、今正確に思い出せないのですが、2年前か3年前に教育委員会部局に移行したというケースがあります。文京区自体は児童館も教育部局で運営しておりまして、同じ児童青少年課の違う課で運営をされています。異動したときにどういふ変化が生まれたのかというと、実はそんなに大きな変化は生まれていなくて、このあたり、文京区というところが福祉や教育という領域にとらわれず子供を支えていこうというスタンスがあるように感じています。

私自身が児童館という世界から、より社会教育寄りの施設に来て感じているのは、やはり健全育成という言葉の使われ方が少し異なると感じています。児童館の健全育成というのは発達基盤を整えることだと思っています。いわば主体性を発揮するためのエネルギーを養う場所、そんな印象を持っています。一方で、社会教育の健全育成というのは、ある意味、字のごとくの健全育成で、そこから主体性を育むためにどうしたら良いのか。そんな役割分担がなされているように感じています。このようなことから、福祉的な要素と教育的な要素は一体的にやっていくことが好ましいというふうに感じております。

【酒井副会長】 平日は何時ごろにどういふ子供たちが集まってきて、週末はどんな感じなのか。子供の集まり方と、どんな子供たちが来るのか、教えていただけますか。

【白田館長】 開館時間が朝9時から夜9時となっております、中学生は夜8時までの利用となっております。平日は4時から7時ぐらいがピークで、休日につきましては1時ぐらいから7時ぐらいまでがピークの施設となっております。

中学生、高校生の比率は、高校生のほうが増えてきています。男女比率はほぼ変わらないという施設となっております。その上でどんな属性の子が来ているかということ、一言で言

うと様々ですが、うち8割くらいは、友達と遊びに来た、卓球をしに来た、ゲームをしに来たなど、どちらかというと娯楽要素で使う子が非常に多いです。残りの2割がここをステージとして、チャレンジする機会として使う、あとは学校や家庭に居場所を感じにくい子が第三の場所として利用しているケースがあります。

【酒井副会長】 プロジェクトをそこで行っている子供たちというのはどんな子たちですか。

【白田館長】 これが決していわゆる学校で優等生とも限らないというのが、施設を運営していて非常におもしろいところです。今増えてきたのは、職員との関係性の中で、「〇〇が言うならやってやるか」と言って、背中を押されて始まるような子たちというのが非常に多いですね。

【酒井副会長】 職員の方の後ろ盾があってプロジェクトが活性化される、そういう関係にあるわけですね。

【白田館長】 そのとおりです。

【林委員】 学校教育との連携を見たときに、事業をやっていくときに入っていくやすい学校と、なかなか入っていくにくい学校などいろいろあると思うのです。どういう学校だと割とやりやすく、どういう学校だと入っていくにくいというのがもしあれば、可能な範囲で教えていただけるとうれしいです。

【白田館長】 誤解を招きやすい施設でもあります。誤解を招きやすいというのは、複数の学校が関わるということはそれによって生まれるトラブルも生じやすいということで、そういったことを御懸念される学校の先生はかなりいらっしゃいます。同時に、価値として感じてもらえるのは、「多様な場所で多様な人と出会えるから良いよね」と感じてくれる先生で、このあたりが学校の管理職をされる方がどのように御判断されるのかというところで学校への入りやすさは大きく変わってくるかなと思います。

ただ、分かりやすくつながれるのは何か子供に心配なことがあったときです。このときは、先生の考え方云々にかかわらず、子供のためというところで気持ちが一貫しますので、そういうことをきっかけに学校の先生に御理解いただいて関係性が深まるケースがありますね。

【松山委員】 多様性を担保する人材の確保が課題ということで、多様性は結構キーワードのようにいろいろ出てきたと思うのです。今、多様性の中でもいろいろな側面があると思うのですが、特にこういった観点が不足している、こういう人材が必要というものが

具体的にあるようだったら、イメージさせていただくために教えていただきたい。

【白田館長】 大人が頭の中で想像するようなもので、これからの社会にはプログラミングが必要だからみたいな要素もあります。この材料の用意というのも、目の前の中・高生から沸き上がっているものにどう対応するのかわかなくて、今具体的に困っているのは、例えば動画編集ができるスキルのある職員がいるかどうか。LGBTQに興味がある職員がいるかどうか。その他、ダンスが踊れる職員が必要だといったところですね。

【松山委員】 中・高生の多様な興味というか、関心領域に対応できる大人が今のところ不足しているという感じでしょうか。

【白田館長】 加えて、我々自身が思春期の揺れる心を受け止める専門性などを担保できないので、このあたりの専門家の存在は必要かなと思っております。

【松山委員】 文京区ですといろいろなNPOが関わっているような印象があります。最近もあるNPOが居場所支援ということで入られたりして。そういった団体との連携や情報交換みたいなのがされている、もしくは、される予定など、そういったところの難しさなどもあるのか気になります。

【白田館長】 これからの課題だと思っていて、広石委員は文京区で活動されていて、ソーシャルイノベーションの部分で活躍されているのですが、そういったところとのつながりは正直まだやり切れていないかなというのは感覚知としてあります。ただ、例えば今挙げたNPOというのは、文京区で活動されている18歳以上の若者支援もやっているNPOですが、そういったところとは実は所管する部署も同じだったりして、実際につながって意見交換等を行っているところですね。

ただ、複数のNPOとつながれているかということ、まだまだそういう段階ではないので、今後の課題だと感じております。

【松山委員】 文京区ですと、例えば不登校など、少し見えにくい青年たちの姿みたいなものがあるように聞いているので、今来ている子たちはどういうルートで来ているのか。例えばアウトリーチみたいなことは何かやられたり、考えていらっしゃったりするのかどうなのかお伺いします。

【白田館長】 利用者の来館のきっかけは、7割、8割が友達に誘われてということですね。どんな広報よりも友達の口コミは効果があります。それが継続利用につながるのには、職員と話して楽しかった、自分の目的と合致した子——例えばバスケットができる、卓球ができる、プロジェクトができると合致した子が比較的来ているような印象があります。

アウトリーチとしましては、先ほど御紹介した出張授業、出張 b-lab を任意の区立中学校に実施しております。実は、先ほど御紹介した定時制の男の子も最初の出会いはこの出張授業でした。こういったところをやっていきながらですが、まだまだ私たち自身が外に出てアウトリーチする方法はあるような気がしていて、模索していかなければと思っています。

【笹井会長】 それでは、次の発表に移らせていただきます。調布市青少年ステーションCAPSの皆様、よろしくお願いします。

【平澤館長】 青少年ステーションCAPSの説明をさせていただきます。私たちの施設はもう16年たちました。最初の中・高生の居場所はほとんどなくて、どうしたら良いのだろうということで、当時いたスタッフと試行錯誤しながらやってきた施設になります。来てくれている利用者層としては、この後、話があると思いますが、地域性がすごく出ています。それを聞いていただいて、どういったことをやっているのだろうとイメージをしていただければすごく良いかと思います。

あとは、専門性にかなり特化している施設でして、スタッフもそれぞれその専門分野があり、ギターを教えられるスタッフやダンスを今でも現役でやっているスタッフがいます。b-lab さんとは2月ごろコラボをすることになっています。そういった視点でも見ていただけると良いかと思います。

【北村主任】 調布市青少年ステーションCAPSの北村と申します。施設概要のところはざっくりさせていただきまして、どのようなことをやっているのかというお話、それから私が働いている中で気づいた点、そして今少し話題になっているかなと思いますが、不登校に対してどういうふうなアプローチをするのかというところを考えていきたいと思っています。

あと、今日はCAPSの卒業生という形で大澤君にも来てもらっていますので、私が15分ぐらい話して、大澤君に10分ぐらい体験を話していただくかなと思っております。

最初に、CAPSの概要になります。平成15年に調布市で開設いたしました中学生、高校生向けの児童館となっております。ですので、こちらは完全に児童福祉分野の施設となっております。開設時は調布市が直営で行っていましたが、平成19年度より我々のNPO法人ちょうふ子どもネットが受託運営をしております。1日平均して、中学生、高校生世代が80人ほど来館する施設となっております。

朝の10時から夜の8時まで、お休みは月2回、第2・第4月曜日は休館日です。

CAPSの周辺施設の特徴についてです。CAPSの近隣には調布市立の中学校が2校、私立の中学校が1校ございます。また、都立の高等学校が3校、私立の高等学校が1校あります。こちらは全て自転車で20分圏内のところですので、主な利用者、7割、8割はこの7校から来ています。ただ、近くの中学校の中に1校、特別支援学級があります。また、近くに都立特別支援学校の高等部もあります。この二つにつきましては発達障害と言われている子供たちが行っている学校になりますが、その利用者の子供たちもかなりの頻度で来館いたします。また、大きな特徴といたしまして近隣に児童養護施設が2か所あります。様々な理由で家庭から出て養育されている子供たちの施設が2か所ある。これら全ての子供たちがやってくるというのがCAPSの大きな特徴となっております。

施設の中につきましては、建物の3階と4階になっております。3階は室内になっておりまして、ものづくりができる場所、音楽のスタジオ、ダンスのスタジオがあります。

入ってすぐに、一番左上にロビーがあって、ものが作れるクラフトルーム。また、クラフトルームには自習スペースも作っております。ダンスのスペース、音楽のスペース、自分たちがやりたいことができるスペースを完備しております。

一方、4階は主にスポーツができる設備となっております。室外は主に3on3のバスケットができるコート、それから室内では卓球、ダーツ、ボクシングなどもできる設備があります。

CAPSのコンセプトですが、調布市青少年ステーションCAPSは、家、学校ではない、中学生、高校生世代が過ごすことができる第三の居場所として開設されております。第三の居場所を大きく三つに我々は分けております。一つ目は、安心安全に過ごすことができる場所。二つ目は、音楽、ダンス、クラフト、スポーツ、サブカルチャーなどの活動ができる場所。三つ目は、中学生・高校生世代が自主的にイベントや企画・運営ができる場所であるというのをCAPSはコンセプトとしております。

これら全部まとめまして、ざっくりCAPSの特徴としてここに9個抽出をいたしました。一つ目は、自由に来館ができる場所であること。二つ目は、10時から20時まで開館している場所であること。三つ目は、全ての中学生・高校生世代が主な対象になっていること。さらに、目的を持って来館する利用者のための設備があります。何かをしなくてもよい空間、時間を保障しています。イベントを通して行事を体験し直すことができます。また、先ほど白田さんからもお話がありました臨床心理士がおります。調布市内の調布市子ども・若者支援地域ネットワークの一員でもあります。そして、いつでも誰かがいる場

所であるというのがCAPSの大きな特徴となっております。ここを説明させていただきます。

一つ目の自由来館ですが、来館することを誰かに強制されません。自分でいることを選んで来る場所です。逆に、行かなければいけないということもありませんので、来たくなければ来なくなる。その際には特にスタッフにも何も言わなくなって来なくなりますので、スタッフは「何かあったのかな？」とときどきしながらいたりもしますが、自分で選んで来たいと思って来る場所です。

そして、朝の10時から夜の8時まで開館しています。朝の10時から開館をしておりますので、例えば学校に行きたくないなと思っている子、夜、学校に行っている子も朝やってきます。また、学校が終わった後、夜8時までいることができますので、その時間までいたい子もいることができますし、会いたくない人に会わないように時間を選べる。少し微妙な表現ですが、例えば学校に行っていない子が放課後の時間は行きたくないなと思ったら、その時間は帰っても良いよと、自由に時間を選ぶことができる場所になっています。

そして、全ての中学生・高校生世代が主な対象になっている。これは、児童福祉施設の中でも児童館が持っている特徴でもあります。年齢に該当する子であれば、どのような属性を持っていても、どのようなバックグラウンドがあっても、どのような国籍であっても、家庭がどのような状況であっても、中学生・高校生世代なら無料でいることができる施設です。

施設面ですが、目的を持って来館する利用者のための設備があります。バンドで練習したい、ダンスを練習したい、友達とスポーツをしたい、部活以外で練習したいよという子たちのための設備があります。絵を描くためのパソコンなどもありますし、物を作るための道具もいろいろあります。友達とゲームもできます。それぞれ目的を持って来館することができるスペースになっています。

一方で、何かをしなくてもよいという時間や空間を保障する場所でもあります。何かしなくていいという気分のときに、何もしなくてもいることができる場所です。案外、子どもたちの場所、特に中学生の場所などはこういう場所がないというふうには感じております。

さらに、「イベントをとおして行事を体験しなおすことができる」場所です。

学校の行事の場合ですと、クラスを中心メンバーであったり、例えば今だったら一軍や

陽キャラなどと言われている子たちが中心になって動くことが非常に多かったりもするのです。そうではなくて、自分が何となくやってみたいな、スタッフに背中を押されて、じゃ、やってみるかと思ってやってみるようなイベントに参加して、中学校ではイベントの際に余り活躍できなかった子もここではできる。また、中学校のときに体験して、もっとやってみたいと思ったことができる場所にもなっています。また、イベント自体も来館者絶対参加というわけではありませんので、来た際に参加したかったら参加する、参加しなかったら参加しないということも選ぶことができます。

ここからはCAPSの大きな特徴になってくるかと思いますが、臨床心理士がおります。この臨床心理士ですが、学校等の臨床心理士とは少し趣が違うというイメージを持っていただければと思います。学校の臨床心理士さんは主に部屋にいて、そこにやってきた子に対してカウンセリングすることが非常に多いと聞いておりますが、CAPSの場合は、利用者といつも接して話をするのはスタッフ、職員がメインになっています。その利用者がその職員にだけ伝えたい、「ほかの人には言わないでね」という内緒の話もたくさん聞きます。家庭のこと、友達のこと、学校のこと、それらの悩みを職員がまず受け取って、その上で臨床心理士さんからアドバイスを受けて、そして利用者に戻していくことをやっております。ですので、臨床心理士さんは、もちろん利用者とも接するのですが、利用者と接した職員を後からアドバイスすることによって子供たちの次につなげることを行っております。また、学校とのパイプ役にもなっております。

さらに、調布市子ども・若者支援ネットワークの一員であるということです。これは調布市独自の言葉になってきますが、ケース会議などが開かれる際、学校、警察、児童福祉施設、そのほか児童相談所さん等々を含めまして、気になる子をみんなで包括的に情報共有しようというネットワークを作っております。その中の一員であります。また、一員であるからこそ、それぞれ他の施設の良いところを知って、自分たちだったらできることは引き受けますし、自分たちだと難しいなという子たちに対しては適切な場所を——難しいというよりも、その子にとってもっと適切な場所があるなと思った子に対しては適切な場所を紹介していくネットワークを作ることができております。

これは私が大事だなと思っていることですが、いつでも誰かいる場所になっています。「なにか嫌なことがあった時」と書いてありますが、別に良いことがあったとき、「誰かにこのファンファンした気持ちを伝えたい」というときでも構わないのですけれども、CAPSに行くと誰か知り合いがいる。その子と一緒に共有もできる。もしいなくても職員

が誰かいつもいます。行けば、その職員がいつも挨拶をします。「お！こんにちはー」と声を掛けてくれるので、「ちょっと聞いて」と話ができる場所になっております。というのがCAPSの大きな特徴です。

そのほか事業についてですが、音楽からITまで、それぞれ専門のスタッフがいて対応している場所、大きな特徴は、相談ができます。相談員がいます。支援スタッフがいます。それぞれ交流をいろいろなところと持っています。あとはイベントも行っています。

実は私はCAPSで働き始めて9年になります。この9年間でいろいろ今の子供たちに足りていないと思うことがありますので、ここからはそのお話をさせていただきたいと思えます。今子供たちに足りていないと感じているものは、家と学校以外の場が非常に少ないと感じています。子供たち、特に中学生ですが、与えられた役割が非常にたくさんあります。学校であれば生徒という役割、クラスの中のポジション、キャラ、友達同士の関係、陰キャラ、陽キャラや、部活に入れば先輩、部長であるという役割、レギュラーでないという役割などいろいろな役割があります。また、家に帰れば「お兄ちゃんでしょう」と言われてしまう場合もあります。子供である、受験生であるという役割、いろいろな役割、ペルソナ（仮面）をいろいろかぶりながら生きています。その中で自分自身でいること、何もペルソナ（仮面）をかぶらないで、自分自身の素でいられる場所が少ないのではないかと感じています。

また、失敗できる場所がなかなかないのではないかと感じています。こちらが何か提案、「やってみようよ」と言っても、「どうせできないから」「どうせやってもさー」という声を非常によく聞きます。失敗することが前提になってしまうことが多いと感じますし、その根っこには何があるかという、それぞれ道筋が示されていることが非常に多いと感じています。大人が道筋を示しているのだから、これをやればこうなるよね、さあ、やってみようみたいなことが非常に多いのですが、まず自分がやりたいなと思ってやったときに、大人が「それ、言ったことと違うじゃん。だから失敗するんだよ」と言ってしまうがちなのではないかと感じております。失敗するよりも、その挑戦を認められる場、どんな挑戦もおもしろがって笑ってくれる。失敗しても、「まあ、大丈夫、大丈夫、そんなこともあるよ。格好良かったじゃん」と言ってくれるような大人が余りいない。その場が余りないのではないかと感じています。これは私が子供たちに今足りていないと感じているところです。

続きまして、不登校とCAPSです。子供たちが最近不登校になっているという話はよ

く聞きます。ちょうど私は先週まで遅い夏休みをいただいてコスタリカに行っていたのです。ツアーで参加して、そのツアーの参加者の方々はみんな私のお父さん、お母さん、60代、70代の方々だったのです。私がユースワークをやっているという話をすると、「私の周りでも不登校の子がいてさ」という話が多いのですが、不登校は結構います。その中でCAPSと不登校ですが、子供たちは学校へ行かなければいけないというのはみんな知っています。日本人の義務だと思っています。本当は学校に子供たちを行かせるようにするのは大人たちの義務ですが、まるで自分たちが行くことが義務のように感じています。「でも、学校へは行けない」というふうに彼らの心と体が言っています。

学校の対応は、先生方は非常に頑張って自分を登校させようと努力されていることは分かっています。また、保護者、特に母親が「学校に行かないことによって将来どうなるんだろう」という不安を抱えていることも痛いほど分かっています。児童養護施設の子供たちも、自分たちを養育してくれる大人たちが自分たちのことを心配してくれることも痛いほど分かっています。それでも学校に行くことができないというのが現実としてあります。

そんな中でCAPSなら何ができるだろうということです。CAPSでは、自分たちが選んでここに来ることができます。いたい時間、この時間までだったらいることができます。誰でも構わない。全ての子供たちが対象です。やりたいことができます。何かしなくても良いです。何かやりたいなというときにそれをすることができます。職員がいて、その裏に臨床心理士さんがいます。ほかのネットワークにもつながっています。何より、行けば誰かがいるというのがあります。カウンターでお話をしていて、パソコンばかりやっていた子たちが何か次のきっかけになるということはCAPSでもよくあることになっています。

CAPSの場合は、職員は非常に多様性を持っております。というのは、男性、女性、いろいろな職業をやっている方、経験している方、いろいろな職員がいます。今、利用者に実際に対応する職員は9名おりますが、例えば私だと日本大学芸術学部を卒業して、サッカークラブで働いて、FC東京でも働いていました。実際にダンサーとしてダンスの大会に出ている者もいますし、社会人になってバンドを楽しんでやっている人もいます。大学までバスケットをやっていた者、名古屋に住んでいて毎回コミックマーケットに行くのが大好きなおタクのお母さんなど、いろいろな属性の大人がいますので、いろいろな利用者が来ても誰かしら対応できるように職員がおります。その誰かがいつでもいるというのがCAPSという施設になっています。

ただ一方、CAPSだから難しいこともあります。これは児童館という枠組みだからこそ難しいところでもあります。子供たちが学校に午前中行かないで例えばCAPSに行っているとなったときにどのような対応をするかというのは、学校長先生の判断によって様々です。「絶対に学校に来なくてはいけないね」という方もいますし、「まあ、そういう時間も必要だよ」という方もいらっしゃいます。そこは、学校長が代わるたびに我々も出向いてお話をします。ただ、全てが子供たちを中心に据えて考えたときに、それが正解になるかどうか。いろいろな選択肢があっても良いのではないかと我々は思うことも多々あります。そこはやはり児童館だから、教育の施設ではなくて福祉のところだから、分野が違うのだからというところは非常に大きいのではないかと日々感じています。

その中で、平成28年5月20日に文部科学省と厚生労働省の局長通知として、「生徒指導、家庭教育支援及び児童健全育成に係る取組の相互連携の推進について」という依頼文書が提出されております。児童館のところを抜粋して読ませていただきます。

児童の健全育成に当たっては、地域での多彩な活動の実績を有し、学校関係者とは異なる視点で子供や家庭の悩みや問題の解決に関わることのできる特性を生かして、民生委員・児童委員、主任児童委員、民生委員児童委員協議会、放課後子ども総合プラン関係者等が継続的に学校関係者と情報の共有を行い、連携・協力が図られるよう努めるとともに、例えば、民生委員・児童委員、主任児童委員が地域の家庭教育支援チームに参画するなど、家庭教育支援関係者との一層の連携が図られるよう努めること。

また、児童館等では、健全な遊びを通して、児童の自主性、社会性、創造性を高めるよう指導を行っているところであり、児童の健全育成の観点を踏まえ、児童の社会活動参加への理解、協力等の支援について、学校等との更なる連携を図るよう努めること、という局長通知が出されております。文部科学省、厚生労働省の局長通知として、児童館だけではなく、もっといろいろな地域の資源と関わって子供たちを育んでいこうという通知も出されております。我々は、これも一つのチャンスという言い方は変ですが、これをもって一層学校と協力しながら地域全体で子供たちを見ることができれば良いのではないかと考えております。

というのが私のここまでの話ですが、ここからCAPSの卒業生の大澤君から話を聞きたいと思います。実は私も大学を卒業するときに就職に失敗しまして、1年ぐらひきこもりを経験しました。大澤君も実は余り中学校には行かれなかったというのがあります。ですので、中学校に何で行けなかったのかという話。さらに、では、何でCAPSに来ら

れたのか。CAPSはどういう場所だったのか。また、CAPSが良かったところという話をしていただきたいと思います。

【大澤氏（CAPS卒業生）】 何で学校に行かなくなったかという話からですが、時期的には中学1年生の2学期終わりか3学期初めぐらいだったと思います。自律神経失調症という診断が下りまして、交感神経と副交感神経の切り替えがうまくいかない、早朝の活動が難しいという診断は下ったのですが、そもそも学校に行きたいという気持ちがその時点で余りなかったのです。理由としては、小学生から中学生になったときの環境の変化に気持ちが余りついていけなかったというのがあります。

一個一個はそれほど大きな理由ではないです。今まで10分ぐらいで通学できたのが一気に30分以上になって歩くのが大変だ。新しく着た制服が重たいし、通気性が悪いし、暑いしで着るのが嫌だった。大量に入ってきた別の学校の同じ学年の生徒のグループなどにうまく入っていけないなど、細かい理由はいろいろあったのですが、プラス自律神経失調症というものがあって早朝の活動ができなくなったタイミングで、病気を治して学校に行きたいみたいな気持ちがその時点でほとんどないわけですから、そのまま段々学校に行かなくなって、ずるずると。調子の良い日だったら午後から行こうという気持ちも、行かなければならないという義務感みたいなものはあったのですが、行きたいという気持ちはどんどんなくなっていきました。中2の終わりぐらいから中3終わりまでは個人面談ぐらいしか行ってない状態になっていました。

通信制高等学校に入ったのですが、そこからは単位的に必要な授業だけ出るという感じで、合計したら高等学校も3年間で数十日ぐらい通う形で、学校にほとんど行ってない状態になっていました。

なぜCAPSに行き始めたかということですが、CAPSの存在と施設で何ができるかというのは、中1の最初の段階で友達に誘われて二、三回行ったので知ってはいたのです。ただ、不登校になるまではほとんど行っていないような状態で、友達に誘われたからその場所に行くぐらいの感覚だったのです。CAPSでパソコンの貸し出しをやっていまして、それでパソコンをいじったりゲームをしたり、自分の持っているゲーム機を持っていった。だから、通い始めた段階では、行かなければならないという自分の中にある義務感や、学校に行っておかしいという親の気持ちが隠していても前面に出てくるわけです。しゃべっている間に言葉の端々に「学校へ行ってくれないかな」みたいな感情が表れるのです。そういうところから逃げ出したくて、学校に行くのも嫌で、段々学校に行かなくなるにつれて

CAPSに行く頻度が増えていく状態になっていきました。

何でCAPSが良いのか。ほかの場所ではだめだったのかというふうに聞かれると若干曖昧な部分もあるのですが……。学校に行ってほしいという親だったり、学校に行ったら行ったで、ふだん来ないやつが来たみたいな異物感だったりから解放される場所であって、いてもよくて、いなくて良い場所がCAPS。そういう場所だと、当然、放課後になると生徒なども来るのですが、普通に学校に行ったら「何で学校に来ないの？」みたいな質問が飛んでくるのですけれども、CAPSみたいに、いてもいなくてもよくて、いろいろな世代がいるみたいな場所になると子供たちの対応も変わってくるのですね。CAPSにいる時間のほうが圧倒的に長いのですが、「何で学校に行かないの？」みたいな話は全然出ないですね。関わる時間の長さが全然違うために。だから、そういう環境によって態度や考え方が変わるのだなと今となっては思います。だから、何となく居心地が良くてその場所にいたのだらうと思います。

不登校のための施設としてCAPSがあったら多分行っていなかったというのはあります。不登校のためと言われたら、学校に行くとか社会復帰をするという前提があるじゃないですか。そうしたら、それには向き合いたくないし、そのタイミングでは向き合える精神状態ではなかった。ここはこういう場所だから、こういうふうにステップアップしていきましょうねみたいな感じで来られたら、多分CAPSにも行かなくなっていたと思います。いても良い…。結構曖昧な表現が今までの施設紹介の中でもあったと思うのですね。多様性があって、ばしっと決まっていなかったからこそ行ける。そういう場所だった。

通い続けるうちに、段々ほかの利用者だったりスタッフの人との会話も増えてきて、さっき少し紹介があったCAPS内のイベントの実行委員などにも高校生ぐらいから、背中を少し押されたりしながら参加するようになってきました。

あとは、CAPSは、児童館も委託事業なのですが、ほかの地域のお祭りなどにもお店を出したり焼鳥を売ったり、たまにやるのですけれども、そういう施設外での活動にも段々顔を出したり手伝いなどをするようになっていきました。

最初に通うきっかけだったのは、ゲームをやったり、パソコンをやったりという部分ですが、ひきこもりの人間がパソコンやゲームをやるためにここに通っていますみたいなことを言ったら、余計に社会との関わりを減らしているのではないかみたいな印象を受けると思います。ただ、そこが結局きっかけというか、関わらなくて良いという状態を許容されたからこそ、そこに逃げ込んでというか、そこに行くようになった。ただ、さっきも言

ったように、いつでも誰かいるのです。だから、関わらないように逃げてきた場所なのだけれども、自然に自分が関わりたいと思ったタイミングで人と会話をするということが増えていって、一見マイナス方向に向かっているような印象があるのですが、関わらなくて良いという許容というか、入り口があるからこそ人と話すようになっていって、最終的に今のお仕事をさせていただいているのです。

そのおかげで、結局、人との会話というのは、不登校だった割には全然絶えないまま今までずっと過ごしてきました。むしろ小学生のときなどのほうが人としゃべるのは苦手だったのです。初対面の人などと話合いや、こういう場でこういう話をするというのも昔だったら絶対に引き受けなかったと思います。普通に学校に通っている以上に、年齢なども全然違う人たちと話すタイミングがたかさんできまして、関わる人数だったりも全然桁違いの人数と話したり、挨拶したりという機会ができたおかげで、今では人と話したり、初対面の人と会ったりというのも精神的な負担は以前と比べたらほとんどないような状態になれました。

まとまりがつかなくなってしまったのですが、そういった理由で私にとってこのCAPSというのは必要な場所でした。

【笹井会長】 ただいまの御発表について御質問がある方はお願いします。

【広石委員】 学習支援というか、不登校のときに学校に行っていないとして、勉強アップデートや高等学校受験のための勉強のサポートはCAPSの中でもしているのですか。

【大澤氏（CAPS卒業生）】 システムとしてはありましたが、私は結局利用していませんでしたね。そのときは勉強するのも嫌だったし、進学なども考えなければいけないという気持ちはあったのですが、それに向き合うような精神状態ではなかったのです。

【広石委員】 大澤君は御自身でどういうふうに勉強しましたか。通信制の高等学校へ行こうかなと思ったときなど、どういうふうなリソースを使って勉強したのか。

【大澤氏（CAPS卒業生）】 余り参考にならないかもしれませんが、完全に独学でやっていました。テスト1日前から全部突っ込むみたいな形です。

【広石委員】 北村さん、その辺のサポートの在り方や、もしくは、その辺はどこまで館としてやるかやらないかということに対するお考えはいかがですか。

【北村主任】 自習スペースを作りました。そこで勉強をしている子もいます。今の中学生は偉くて、テスト前になると来なくなるのです。勉強する。来ても、友達何人かで集まって、みんなで丸テーブルを囲んで勉強することが非常に多いので、我々は途中で声を

掛けて、「何やってんの？難しいことやってんじゃない」と話を聞いて、「それ、先生の言ったこと、よく聞いてんじゃない」と褒めるぐらいです。一方で、本当に勉強できない子はいます。これからの時期、年を渡ると急に「be 動詞ってさ、何？」と聞いてくる受験生がいたりします。

そうすると、スタッフが総出でかかるのですが、その場合は、「分かんないから一緒に教えよう」と高校生を巻き込んだりもしています。テスト前にやはり勉強が分からないという子もいます。例えば6月ぐらいの時期の場合、勉強でひっかかっているのは小学校のときの分数の足し算、引き算、掛け算、割り算、加減、あとはケアレスミス、途中式を書かないなど、大概そこなので、横にいてひたすら一緒に小学校の問題を解いていると自然に何となく自信がついてできるようになります。英語の場合は、テストで点数を取りたいのだったら英単語を覚えて熟語を覚えればどうにかなるから「GO!」と言ってやっています。

学習はスタッフにとってすごく良い機会で、いつもは大勢の中の一人のスタッフだったり、大勢の中の一人の利用者だったりすることがあるのですが、学習に向き合っているときはスタッフと利用者が1対1になるのですね。場がもたなくなると利用者はいろいろな話をしてくれるので、家庭のことなども深掘りができるタイミングでもあります。だから、勉強を教えるぜというよりも、基礎のところは教えられるよ、さらに難しいところは先輩に聞いてみよう、自習のスペースがあるよと促しています。

【大澤氏（CAPS卒業生）】 利用者のときには私も勉強を教えていました。高校生のときですが、中学3年生、受験生の利用者がいたのです。10回、20回ぐらい数学の問題などを、長いときは3時間ぐらい横について教えたことがあったのです。自分は全然勉強やらなかったのですが……。普通に学校へ通っていたら絶対機会がないような、自分より年下の人に勉強を教えるという時間はありました。

【青山委員】 教育とは少し距離がある施設だというところが説明の中でありましたけれども、来館者の青少年たちにどんなふうになってほしいか。もっと下世話に言えば、何々力を付けてほしいかみたいな目標というか、支援のゴールのようなものが共有されているのでしょうか。

また、そうしたゴールがあるかないかにかかわらず、例えば施設がうまくいっているかどうかということはどうやって評価しているのか。うちに来ると何々力が付いた、とか。それこそ学校に行けるようになった子が増えたみたいな言い方はなじまないような気がす

るのですが、もう一方で、そのあたりの施設の意義などを、受託元として行政と、あるいは地域、学校などとどうやりとりしているのでしょうか。

【北村主任】 ゴールは共有されているかどうかというところですが、ビジョンというふうに理事長は言っていますけれども、私は、子供たちが自立した社会人になってくれれば良いなと思っています。そこだけを目指しています。というのが私にとってのゴールです。

【青山委員】 施設全体では余りそういうものはないですか。

【平澤館長】 NPO法人としてビジョンを掲げています。そのビジョンは、ありのままの自分であることができ、誰かとつながって、つながりを作れる人を増やすというのをビジョンとして掲げているので、CAPSの施設としても、自分を隠さず、ありのままの自分であることができる。あとは、そこで利用者同士が世代を超えてつながったりする。今度はずなげていく立場、大澤君みたいな立場になってもらうというのがスタッフ間で共有されているものになります。

【北村主任】 施設の評価のところですが、ここは非常に難しい、大事な御指摘だなと感じています。決して数字で表せるものではないというのがあります。例えば現在来館者数は年間3万人程度であります、3万5,000人を目指して3万5,000人になったとき、スタッフが一人一人の利用者とどこまで向き合うことができるのかと考えたときに、それは成功と言えるのかどうかというのは非常に考えるところではあります。

b-labの白田さんと2003年ですか、一緒にエビデンスを作ろうと考えてやっていたのですが、だからといってエビデンスができたわけではない中で、我々が評価をいただいているのは、先ほど平澤も言うておりましたが、地域に出ることで評価につながっているのかなというふうには感じています。地域のそれぞれの小学校区、中学校区のいろいろな団体さん、PTAさんであったり、学校開放といっているような団体であったり、ジュニアリーダーであったり、様々な団体と付き合いの中で、CAPSさんに子供たちが行けば大丈夫だよ、安心して預けられるよね、紹介できるよねというような実績を積み重ねることで信頼を得ているというふうには考えています。

【平澤館長】 追加させていただくと、実は直営のときにはもう外に出ないというスタンスだったのです。

【青山委員】 外に出ないというのは。

【平澤館長】 地域には出ないというスタンスだったのです。それは秘密基地としてあ

るので、大人に知られないように外に出ないというスタンスだったのですが、私たちが平成19年に委託を受けたときには、スタッフの中で地域で活躍されている方がいらっしやったので、その方を基点にいろいろなところに出ていこうと。ただ出ていくだけではなくて、彼ら若者が活躍できる場を作るために私たちは外へ出ていこう。あとは、施設自体がすごく珍しい施設なので、周りの方々が、「ギターを背負った金髪のやつが出てくる、何の施設だ？」みたいなのに対して、私たちが実際にパンフレットを持って行って、是非見に来てくださいというアプローチもしてきたのは事実です。それが地域だけではなくて、市内全域に今は行き渡っています。そうすることで保護者の方からも安心してもらえたり、いろいろなところで活躍できる場ができる。選択肢をいっぱい増やしていくというところでやっております。

【白田館長】　　すごく大事なところだなと。うちもどういふふうに、要はエビデンスを何のKPIで表現しているのかという話だと思うのですが、まず分かりやすいのは、来館の指数というのはお互いにKPIになっていると思います。加えて、主体的な活動などはプロジェクト数を組織内ではKPIの上でやっているのですが、それが行政評価になっているかどうかというのはまた別の議論かなと思っています。行政的な評価は、来館者数とアンケート調査による満足度調査で行っているところが比較的多いのではないかと思います。

ただ、居場所施設で特に伝えたいのは、いかに大澤君のような職員との関わりを持って成長してきた子を伝えるかどうかなと思っています。この部分は、量だけではなくて、ストーリーで伝える必要があると思っています。これをブログだったり、こういった外部発信の機会だったり、あとは職員の相談記録自体の件数もエビデンスになると思っています。このあたりを積み重ねて行政に伝えるみたいなことも努力の仕方、見える化するためには必要かなと感じています。

【平澤館長】　　行政の方とどう付き合うかがすごく大事だと思っています。コミュニケーションをいかにとれるかで、人と人との付き合いなので、私たちがやっていることを説明することでイメージしてもらおう。その関係性がすごく大事なと。

【笹井会長】　　一応二つの団体、施設からお話しいただいて、これからは少し意見交換をしたいと思います。どなたからでも結構ですから御自由に御意見をいただければと思いますが、いかがでしょうか。

【酒井副会長】　　今、大澤さんがこちらに来られて、不登校の施設には余り足が向かな

かったという話があったのです。そちらの市でも適応指導教室があると思うのですが、例えばああいうところに来ている子供たちがそちらのほうに足が向くというか、そういう子もいるのかなと思って、そこの連携というのはどういう仕組みになっているのか伺いたかったのです。

【平澤館長】 適応指導教室との連携はなくはないです。でも、最終的にCAPSを利用するかどうかの選択は本人たちにさせているところで、一度来ることもあれば、その後来ない子供たちがほとんどです。大澤君みたいにふらっと来る子供たちのほうがより利用するかなと。

【酒井副会長】 そちらのほうに向かう子と適応指導教室に向かう子と、どちらが良いかなと思うということがあるわけですね。

【平澤館長】 適応指導教室がすごく充実しているからCAPSに来ないのかもしれないですね。

【広石委員】 b-lab やCAPSはすごく良い活動として知られているとします。だとして、どれぐらいあれば良いのか。仮に無限に予算と無限に人員がいるとしたら、例えば調布市の中に幾つあればなど、調布市にも府中市にも全部の市ごとにあったほうが良いのか。もっときめ細かくあったほうが良いのか。例えば文京区も湯島にあります。本当はもっと文京区内だけでも四つ五つぐらいあったほうが良いのか。それとも、23区内に幾つというのは難しいかもしれない。どういうふうに展開すると本当に子供たちが取り残されないのかなとさっきからずっと考えています。どう思いますか。

【白田館長】 どこまで天井を取り払いますか。

【広石委員】 東京都が無限に予算を付けてくれるとしたときに、逆にベストな状況はどういう状況かなと考えて。

【北村主任】 であれば、自転車で20分圏内に必ず一つある。

【広石委員】 なるほどね。

【笹井会長】 公民館みたいなものですね。

【広石委員】 予算がどこまでか難しいですが、数を増やすために何が必要か。例えばスタッフの育成がすごく必要なのか。こういう施設を10倍に増やそうとなったときに、お金以外に必要なことがあるとしたら何が一番必要だと思いますか。こういう皆さんのような活動をほかの地域にも増やそうみたいな。

【平澤館長】 私は、やはり人はすごく大事だと思っていて、建物があれば良いという

ものではないというのはすごく実感しています。ただの施設貸しではなくて、いかに若者、青少年とコミュニケーションをとって信頼関係を作るかというところが彼らの第一歩につながってくるかなと思うので、人材にお金をつぎ込んでもらおうと良いかな。

【広石委員】　　そういう人たちは育成可能なものなのか。ある程度スペシャルスキルがあるから発生頻度が低いものなのか。割と大量生産可能なものなのか。

【白田館長】　　私は、育成はそこまで難易度が高くないのではないかと考えています。というのは、我々の施設自体も教員免許が必要などわかりやすい専門性を担保しているわけではないにもかかわらず、成果が出ていることにも言えます。あえて言うなら志は重要です。関係性が生まれるのは本当にふとしたきっかけで、最初は卓球をやっていたりするわけですけど、そんなところからその人にとってのオンリーワンになったときにいろいろな相談や関係性が生まれてくるので、そういう瞬間を見逃さない人材で、かつ、子どもたちを根気強く支えられる人材であれば、ユースワーカーになりうるのではと思います。

【北村主任】　　私は資質もあるかなというふうには感じています。私自身が職業を5回ぐらい替えている人間なので、いろいろな多様なところを見てきて、「人間は失敗することもあるよ、大丈夫だよ」と言える立場になっているからこそ今この仕事ができていると感じていますので、かくあるべきで物を考えてしまう人は厳しい職業になっているかなというふうに私は感じています。

【白田館長】　　私自身も資質自体は正に北村さんがおっしゃる部分だと思います。途中でも触れましたが、若者のためにではなくて、若者とともにみたいな姿勢でできるかどうかというのは一つ大きいところかなと思っています。

【笹井会長】　　行政や制度の仕組み、形式の話なのですね。ただ、こういう話というのは事実行為というか、機能というか、実際の営みの話なので、それが仕組みを整え、形を整えることで本当にその機能がそこに付随してくるのかというのは少し別問題としてあるのだらうと思います。

【青山委員】　　先ほどの職員の養成などにも関わると思うのですが、居場所施設の話もいつもいろいろな形で聞く中で難しいと思うことの一つは、一方で、そのままが良いよというメッセージを伝える。ありのままが良いと。だけれども、どちらの館も様々な成長のストーリーが語られるわけですね。大澤さんのように、「学校に行け」と言われなから良かったという一方で、やはり何らかの成長への期待みたいなものはあると思うのです。つまり、何かできるようになることがある。「できるようになる」とことと、「そのまま

でよい」ということの間には、どこかで矛盾があると思います。ありのままにしながらつながらる力を付けるというのは、もう一方でありのままではなくなるということだと思うのです。言葉尻をとるわけではないですが。

つまり、成長というのは、ある種の現状の否定とまでは言わないけれども、次の自分になるための行為であると思うので、そこでの成長と、そこにいることの葛藤みたいなものが、カタリバの資料だと安心から挑戦へというストーリーだったり、もちろんグラデーションがあつてのことだと思うのです。とはいえ、「できるようになったじゃん」というときには一緒に喜んだりするわけですね。そのときには、やはりできたほうが良いという価値観はどこかに残り続けるとすると、その二つの価値観をどうバランスをとっていかということ、ミクロの場面での職員の専門性にも関わるし、ハード面での空間の作り方にも関わると思うのです。そのあたり、どうなっているか。言葉にしてもらえたらうれしいな。あるいは、皆さんで議論ができたなら良いなと思っていたのですが、いかがでしょうか。

【白田館長】 私としては、御指摘はごもっともだと思いつつ、要はタイミング議論かなと思っています。「何もしなくても良い」が必要な時間もありませんよねというところです。ただ、我々は非常にお節介な生き物なので、その子にとって楽しそうなことや、ためになるというか、「絶対おもしろいよ」というのはお節介として言いたくなってしまうこともあります。

このタイミングを見極めるのが、ミクロな専門性と表現されていましたが、そのとおりでと思います。私もスライドの中で循環があると御説明したと思いますが、いかにタイミングを見定めるか。しかもこのタイミングが、いつ起きるかわからないのが居場所施設の醍醐味です。(青山委員のご指摘で) ミクロの場面で専門性を発揮していることに気付かされました。

【笹井会長】 今の青山委員の御質問は、ほかの皆さんはどうですか。

【平澤館長】 私の中では、ありのままという、ありのままの自分でいてはいけないよね、全部出し過ぎるのもよくないよねという話になるのですが、私たちのビジョンの中のありのままというのは、そのタイミング、タイミングが本人のありのままかもしれないと思っています。何かできるようになった。それがやらなければいけないという義務感ではなくて、自然とできるようになった。それはその子のありのままだと思っていて、それを私たちは「ありのまま」という表現をさせてもらっています。

【北村主任】 先ほどの青山委員の「それでもできたじゃん」というのは、本人がやり

たいという気持ちがあるときに、それができたら「できたじゃん」と言うのであって、こちらが無理やりやらせたものができたときに「できたじゃん」とは言わないですね。本人がやりたいという気持ちが出発点であるということ。

それから、ありのままという話があったのですが、ありのままというのは常に固定しているものではなくて、子供たちは常に成長していく。いろいろな刺激を受けて前に進んでいる。そのベクトルはともかくとして。ですので、常に変化していくのだから、それを見極めながら、白田さんがおっしゃっていたミクロのレベルで見えていって、どうやって声を掛けるか、どうやって横にいるかという話だと思います。固定化しているわけではないです。

私は、CAPSが良かったなと思うのは時間が武器になると思っています。大澤君は6年間来ています。本当に高3の2学期ぐらいまで、将来どうなるかなと思っていました、まあどうかなるかと思えるのは、時間が武器になると思っていたからというのはあります。なので、そこはいつか変わるよ、そのタイミングがどこかにあるよというので、いろいろな刺激を与えていって、ある日、急に「石巻に行く」と言い始めたりする。

【広石委員】　そういう意味では、ありのままというのがそのままという意味ではなくて、抑圧されていない状況や自己開示をしたときに受け入れてもらえるような状況がありのままという言葉で団体が表現していることなのだろうと思います。その辺がソーシャルインクルージョンや抑圧などと言ってしまうと何かとても難しいことになるから、「ありのまま」という表現をされているのではないかなと思う。確かに、そういった意味で、そういうところの言葉のイメージや、そのためにどういうふうにコンセンサスをとるか、社会的に共感してもらえるか、その辺は結構大事ですよ、と思います。

【青山委員】　特に、できるようにならなきゃと思っている人たちほど生きづらさを抱えていたりするという「ねば」が強い中で、その「ねば」を取り除きつつ、でも、その次にある成長みたいなものとどうつないでいくかというのは、さっきおっしゃったように、専門性の核になるのではないかと私はずっと考えています。もちろん、プロセスなので、二つが矛盾しているのではないかということだけを言いたいわけでは全然ないです。ただ、根っこに、教育と福祉の融合というようにときに、どこかに摩擦が生じるポイント、難しさを抱えるポイントがあるのではないかとずっと思っています。

【松山委員】　今、北村さんや大澤さんの話を聞いていて思ったのは、何かができるではなくて、本人の自己肯定感というか、さっきのありのままという形でいうと、大澤さん

もそれが別に良いとは思っていないし、北村さんも子供たちは十分分かっていきますと話されていた。そういう中で、そこにいる自分、そういう状態にある自分を受け入れられない子供たちの葛藤みたいなものがある、でも、今自分がこうしてここにいて良いのだという、まず肯定みたいなものがある、それがもう少しくと高揚感などにつながっていくのかもしれないです。そういう子供たちの状況を受け入れるというか。できるようにというよりは、子供たちが自分を肯定できるようになるところが意義なのかなと思いました。

【青山委員】 ついつい教育的な文脈では、自己肯定感を育みたいなのを言うではないですか。そうすると、自己肯定感を育めたほうが良いということにワーカークの価値として持っているかどうかみたいなのに、というあたりのかなりうじうじしたところをお伺いしてしまっただけです。

【広石委員】 それはすごく大事で、地域包括ケアの話などをしていても、コンプライアンス型という、やらなければいけないからやりましょうではなくて、アドヒアランス型というのですが、やったほうが良いですよとまく唆すみたいな感じなのですよ。そうではなくて、コンコーダンス型が大事ですという話がある。それは意思決定を委ねることです。何をやるかは本人に委ねる。ただ、専門職としてはこういうことをしたほうが良いよとは言わないけれども、最終的な意思決定は本人たちに任せるみたいなのですよ。成長するかしらないか。今、階段を上るか上らないかは本人に決めてもらって、そのときに階段を上らないという権利があることを専門職側が受容することが「ありのまま」という言葉になるのだろうと。

学校などだと、どうしてもこの時間までにこう成長しなければいけない。地域包括ケアなどをやっても、行政と現場の乖離はそこにあって、どうしても年内に通いの場を五つ作りましょうみたいな話になる。でも、地域住民がしたいか・したくないか、いつそれを動き出すかは地域住民が決めるのですよというところがいつも論点になるので、いろいろな分野でその辺の専門職や指導的な立場の人間のマインドセットの持ち方みたいなのがすごく重要なタイミングなのだろうと思っています。

【笹井会長】 選択の自由というか、何しようとする自由なのですよというのは学習者の側にあるということがとても大事なのだと思いますね。

別の問題提起などありましたら、どうぞおっしゃってください。

【永島委員】 すごく良い取組ですし、逆に言うと、ここに行けた人たちは良かったなというのはあるのです。少し気になっているのが18歳や19歳など利用できる年齢が決

まっているところで、人によっては、もう少し行きたかったと。ここで今言ったように何かつかんでいけた人は良いのですが、その後がどうなるのかなというのはすごく今もやもやしています。何か成功体験などここでつかんだ方々は良いのですが、その後、地域に出ていっていろいろコミュニケーションをとっているとおっしゃっていたのですが、その後はどういうふうにあるのかすごく気になるところです。

【北村主任】 まず一つ目の年齢制限があるところです。これはテクニカルな話になるのですが、我々は児童館でして、児童館は、児童福祉法上、0歳から18歳までを対象とする施設になっています。19歳までというのは、市長の特別な条例をもって19歳まで扱えるとなっているので、ここは非常に難しいところです。青少年の範囲をカバーする法律自体が非常にぼんやりしているのが日本の現状であるというのが1点。

おっしゃるとおり、気になる子供が気になるままで地域に出ることもあります。CAPSの場合は、もちろん地域の方々の見守りのネットワークの中でのということもありますし、あとは支援スタッフという形のボランティア制度を作っています。これは、利用している子供たちのために先輩たちが活動をサポートする制度ですが、それと同時に職員自身が卒業生とつながるためのツールにもなっています。まずそこで支援スタッフという制度を使いながら、「最近どうしてる？」というような問い掛けはしています。

【白田館長】 団体自身が若者支援の分野もやられているというのが大きいかなと思います。

【平澤館長】 CAPSができる当時、平成15年のときに、児童館という括りでなくて、もっと幅広く来てもらえるようにということは市の方が考えていろいろ手を打ったのですが、最終的には児童館という括りに入ってしまった。でも、それが悪いわけではなくて、18歳と区切られているので、その子たちにとっても、ここは18歳までしか利用できないから自分でどうしていこうかなという気持ちになっていく。でも、私たちのほうから「この子、大丈夫かな？」と思ったときには、その支援スタッフという形でもつながりますし、市の方から了解を得て、その支援スタッフの個人情報には本人の許可があれば法人としても使って良いよという話をいただいているので、法人として活動するときにも声を掛けます。あとは、就労支援までいかないですが、就労の体験をできるサポートも私たちはしていて、観光案内所に若者を雇用して、そこで体験をしてもらって次のステップへ行くということだったり、市の広報課へ出向で行ったり、そこも調布市と良い関係性にあるからこそ若者が行ってもきちんとしっかり面倒を見てくれたりということは今もしています。

す。

18歳を超えた後どうなるかというのは、私たちが見てきた中でも、学校へ行ったけれども実はやめていた。働いたけれども、3年もたずにフリーターになっていたりというのが見えてきたので、就労体験という事業を私たちも始めようというきっかけになっています。

【広石委員】 今の子は15歳で起業する子もいっぱいいたりするので、そういった意味で、こういうところがお金を扱うとなった瞬間に結構みんなぱつとなりがちだと思うのですが、そのあたりについて、意外とそういうことはやっているのか。例えば子供たちがお金を扱う、売買する、メルカリでやりとりするなど、割と経済活動的なものを児童館的なところの中にどう組み込むのかというのが私はテーマかなと思っています。日本の公民館の一つの課題は、お金を扱ってはだめだみたいな感じになりがちですね。ここは社会教育施設なので有料の売買をしてはだめですとよくあるではないですか。例えば高校生が漫画を描いたものをネットで売りますということはどうなのか。逆に、今後そういったものをどういうふうにこういう施設が組み込んでいけば良いと思うか。そのあたりはいかがですか。

【白田館長】 結論から言うと、私たちは文京区から業務委託で運営しているので、越えなければいけないのは、行政側が説明できる理由をきちんと作る必要があります。正直ここは現状難しいです。

ただ、事例はあります。世田谷区に希望丘青少年交流センターという施設があるのですが、こちらは文化祭で実際に中学生が出店した売り上げを得ることで社会体験を学ぶことが必要だということで、実際に学校の校長先生などにアポイントメントをとって許可を得まして、今年度の8月にそれを実施したような実績があるそうです。いろいろな壁はありますが、タイミングがいろいろそろえば突破できる事例もありますので、それをスタートから当たり前にするような施設ができれば、それは実現できるのではないかと思いますし、事例もあります。

【平澤館長】 サポートステーションなどはそういうことをやられていますよね。私たちはそう聞いていて、すごく良いなと思ったのは、本当に市内のイベントで出店して、自分たちが稼いだお金で打ち上げに行く。そういう流れはすごく良いと思うのですが、やはり児童館では少し難しいかな。でも、それができるとすごく良いな。希望丘青少年交流センターさんも私も知っているのですが、そういうことを元々やるということで始まって

いるので、それは是非やっていけると良いなと思います。

【広石委員】　　そういう枠組みをまたどこかで作ってあげれば良いですね。

【白田館長】　　枠組みを作るのは、作るタイミングか初年度かというのが一つ大きなポイントなのではないかと確信しています。

【青山委員】　　公民館も、営利的なものについてはみんなが思っているほど制限はないという通達を文科省も出していますね。公民館では金品の扱いが全くできず、それができないからコミュニティセンターにしてしまうみたいな議論があるので、文科省は今それはもっと柔軟に運営できるルールだということを強調しています。

【主任社会教育主事】　　地域の中で中・高生を相手にしている施設で限界を感じるということか、もっとこういう場が今の子どもたちに作れると良いなという観点からでもいいです。我々からすると、広域的なレベルでどんな仕掛けが打てるのかという問い掛けでも、自分たちに対する問い掛けでもあるのですが、そういうことを問うてみたいと思ったのですが、いかがでしょう。

【白田館長】　　余りクリティカルではないかもしれませんが、地域というよりか、特定の自治体でやっているということは、その税金をどう活用しているか問われるので、それへのロジックとして文京区に住んでいるか通っている子しか使えないという地域の限界が今 b-lab にはございます。

中・高生の実態はどうかというと、地域に縛られません。社会を広く活用していますので、一つ条件としては、あらゆる子が使えるということは今後必ず求められてくるかなと思っています。

【北村主任】　　私は、学校といかに連携をしていくのかというのが課題になる。

【主任社会教育主事】　　学校というのは高等学校ですか。

【北村主任】　　私の場合は中学校ですね。先生たちは子供たちのために思っすぎて頑張っているのですが、もっと地域の資源を活用してもいいのではないかと感じています。生徒だから全てを我々が見なければいけないという思いはすごく大事ですが、だからこそ、子供たちを一番に据えたときに、どれだけの資源があって、その子どもたちに何を提供できるのか。どの可能性を見せられるのかというのは、学校は非常に情報を持っていますし、力もありますので、もっと連携をできたら良いなというふうに感じています。

【主任社会教育主事】　　先ほど成長するタイミングを見極めるのがミクロの専門性だというような発言がありました。これというのは、確かに私も感覚的には分かるのですが、

職員間でそういったものは共有できるものなのか。していたとするのだったら、どういう作業で職員間の中で共有しているというのがあったら教えてもらえると有難いです。

本当ならば、できればこういう話合いをするときに皆さん方に伝えたいのは、ユースワークという考え方をもう少し行政の中に浸透させられないかという意図が私自身にはあるので、そういったところでどういうふうに言葉にしていくかということも課題だとは考えているのです。

後者は感想なのですから、前者についてはどうですかね。

【白田館長】 まず前者についてお答えしますが、先ほどエビデンスの話の中で相談記録を付けていると言っていました。こちらは全職員が閲覧できるようになっていて、事実と感情ですね。事実と主観を分けてメモを記録しています。その内容を担当職員が、特にこれは議論したほうが良いというのを線引きしてピックアップして、それを週に1回常勤職員のレイヤーでディスカッションしています。この子のやりたいをかなえるために与えるべきリソースはどこか。必要によってはボランティア等、もしくはほかのNPOなども調達して誰をアサインするのかということ職員みんなで議論しています。

【主任社会教育主事】 どれくらい時間をとっていますか。

【白田館長】 それは1週間の中で15分くらいですね。15分で四つか五つぐらいの事例をピックアップして対応を検討します。これは、何かやりたいというケースもそうですし、あとは何かに悩んでいるケースです。これはどの職員からアプローチするとよいか。みたいながあるので、これはボランティアの〇〇からアプローチしようみたいな作戦を立てて声掛け等をしたりしております。

【北村主任】 子供の事例の共有については、CAPSの場合も職員間で言葉で共有することが一番多いです。CAPSの場合は毎日、常勤、非常勤、アルバイトを問わず、全ての職員で前日会った子供たちの様子を共有しています。その上で、利用者対応ノートを作成して書き込んでいく。シフト制ですので、その場にいなかった職員にも共有していく。なので、話すことで、職員同士がコミュニケーションをとることで温度感を常に高めていくことを行っています。

【主任社会教育主事】 それは具体的にどれくらいの時間になりますか。

【北村主任】 ケースによるのですが、朝会で行います。長い場合は1件で40分話している場合もあります。どのような対応をとれば良いのか。どこに悩んでいるのか。それこそ誰にと。

大概朝会の時間というのは利用者が少ない時間になっていますので、その意味では時間をたっぷりって一人一人の子供たちのことを共有することができている。では、それを果たして文字にしてエビデンスとして残せているかという、私はまだ足りていないかなというふうに気付かされました。

【平澤館長】 残してなくはないです。今は公認心理士を持っている相談員がそのノートを見返したり、スタッフに話を聞いたりして、数としては残しています。それは市の議会から問い合わせがあったりするので、それを通常にしようということで報告を常に上げている形をとっております。

【白田館長】 これは自己紹介のときにも触れましたが、こどもの城がなくなるというタイミングですごく思ったのは、我々は良き実践者であるけれども、良き広報者ではない。そのときの現場の職員も目の前の子供に100パーセント力を発していたけれども、それを世の中に発信することをもしかしたら怠っていたかもしれないというのが今の私の原動力です。実はこのあたりは役割分担しても良いのかもしれないと思っていて、正しく活動を伝える、PRできる。そのような専門性があるチームが広報を担うなど、実践と広報を役割分担して、居場所の価値を発信できたら良いかなと思っています。

後者のユースワークについてですが、私自身、オーストリアに行ってユースワークという概念を知ったときに思ったのは、本当に便利な言葉だなと思ったのです。何が便利かという、若者のためにやるということで、教育やら福祉やら社会教育やら全ての言葉を飛び越えて、子供のためにというところにつながれる屋号なのですね。今、大人の世界の中で、学校が良かれと思っていることを逆に児童館的なのところが「それ、何でやるの?」と思ったり、その逆もしかりて起きてしまっていることが本当にもったいないと思うのです。横でつなぐ。あらゆるセクション、特に縦割りになっているセクションを飛び越えて若者のことを考える機会を、ユースワークという言葉の下で新しい若者支援を作っていくということは一つ大事な観点かなと感じています。

【平澤館長】 私たちはユースワークという言葉を超えて余り使わない。白田さんが言うことはすごくよく分かるなというのは感じているのですが、私たちはあえてユースワークという言葉を使わない。下のスタッフにも伝えていない。使わなくても良いかなと思って。

【北村主任】 白田さんがおっしゃったのですが、便利な言葉でインパクトがあるので、すね。「何をやっていますか?」「ユースワーカーです」と言うと「何それ?」と必ず聞い

てくる。そこが話のきっかけになる。この前の旅行でも非常に役に立ったのですね。便利な言葉というのは確かです。

【主任社会教育主事】 事務局としてというか、個人的な思いのほうが強いかもしれないですけども、今日いただいた話などを絞り込んで、一つ施策としてまとめていきたいという気持ちが今我々にあるわけです。それをやるときに、どこに収斂させて、どういうふうなワーディングをとって、何を知らしめていくのかと考えたときに、ユースワーカーやユースワークというのは一つのよりどころになるのかな。次回、スウェーデンの若者施策の研究といいますか、実際に北欧で若者施策を調べてきている両角達平さんという方をお招きできることになったので、そういった流れで少し諸外国の取組なども聞きながら意見を交換したいと思って、そのための呼び水になるように皆さん方の発言を聞けたら良いなと思って伺ったところです。

【北村主任】 ほかのユースの施設にもあれば良いなと思うのは、臨床心理士の配置が非常に大事だなと感じています。これは職員一人一人が自信を持って子供たちに接することができるという意味で、臨床心理士、今は公認心理士ですか、その資格を持っている者は非常に重要だと感じています。

【主任社会教育主事】 皆さん方の特徴というのは、職員のバックアップを主にするという位置付けをしているのですよね。そういう理解で良いですね。

【北村主任】 はい、そうです。直接利用者と対応するということはしません。

【主任社会教育主事】 するというところではないところに特徴があるなと思って話を伺ったのです。

【酒井副会長】 今後の課題で、施策を中・高生の中で展開していこうとすると、学校との関係、一つの居場所として学校に承認されることが非常に重要だと思うので、どういう手だてで教育委員会を説得できるのかなというのを考えたいのです。

【笹井会長】 それでは、この審議はこの辺にさせていただきたいと思いますが、4人の方、懇切丁寧に質問にお答えいただいて、ありがとうございました。

それでは、今後の予定に関しまして事務局からお願いしたいと思います。

【生涯学習課長】 次回以降の審議会の予定につきましては、第4回が12月19日（木曜日）、第5回を来年3月17日（火曜日）に開催させていただく予定としております。第4回につきましては、海外の若者支援について講師の方からお話をいただいて、その後に御議論いただければと考えております。会場、詳細につきましては改めて御案内さ

させていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします。

【笹井会長】 それでは、以上をもちまして本日の第3回審議会を終わらせていただきます。御協力いただきまして、ありがとうございました。

閉会：午後8時04分